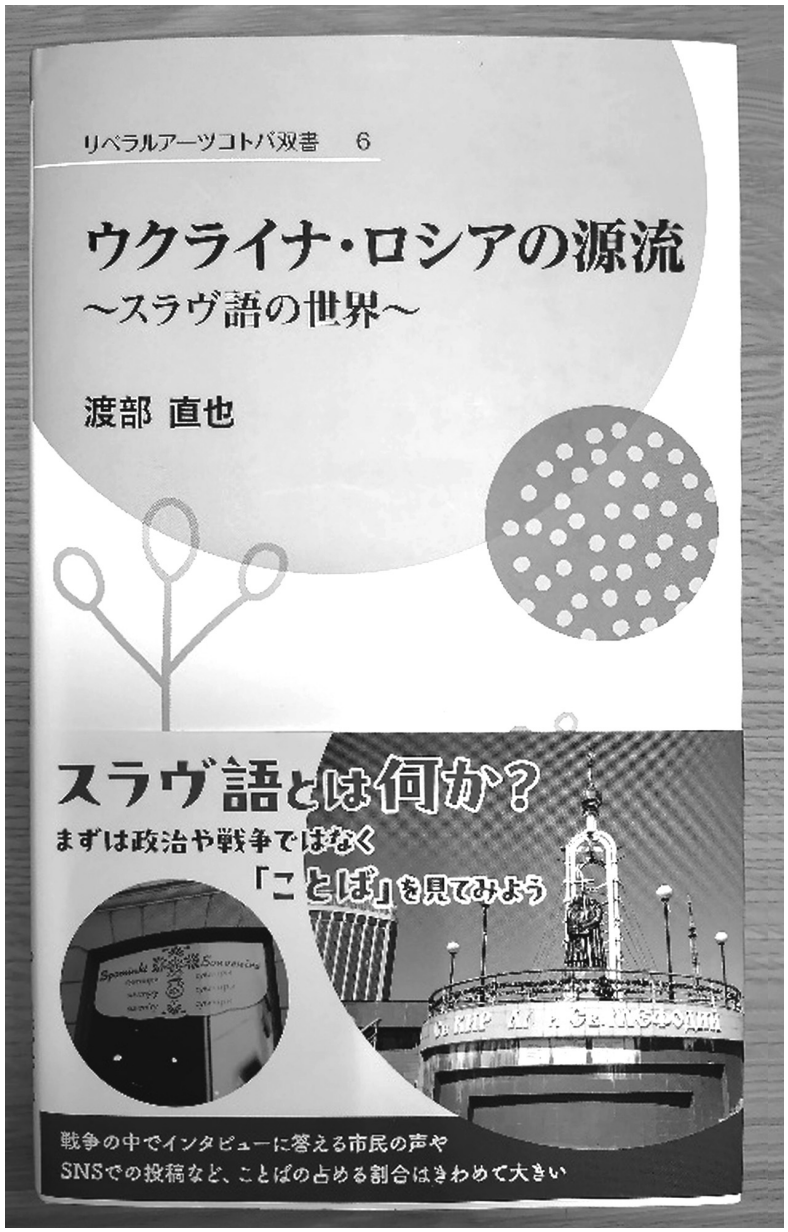
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『ウクライナ ・ ロシアの源流～スラヴ語の世界～』
Author(s)	渡部, 直也
Citation	日本語講座年報. 2025, 2023-2024, p. 18-19
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/102670
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka



渡部直也『ウクライナ・ロシアの源流～スラヴ語の世界～』, 教養検定会議, 2024.

拙著を紹介するのは何とも気恥ずかしいのですが、この本はウクライナ語やロシア語などが属する「スラヴ語派」の言語に関する入門書、および昨今のウクライナ情勢におけることばのありようについてまとめたものです。前半でスラヴ諸語の歴史、発音・表記および文法について概説し、後半ではスラヴ世界における社会と言語の関わり（社会言語学）、特にウクライナにおけるウクライナ語およびロシア語の状況を述べています。博論でスラヴ諸語の音韻論をテーマにしていたのですが、昨今のウクライナ情勢もあって執筆の機会を頂きました。

本書の内容から、少しだけスラヴ諸語についてお話ししましょう。言語についてあまりご存知ない方でも、「スラヴ」という言い方は世界史などで聞いたことがあるでしょうか。スラヴ語派はインド・ヨーロッパ語族の一角を成しており、西はチェコやポーランド、東はウクライナやロシア、南はクロアチアやブルガリアなど、実はヨーロッパのたいへん広い範囲に分布しています。

同じ語派に属する言語ですから当然類似点が多いわけですが、様々なバリエーションも見られます。スラヴ語派はさらに東・西・南の３グループ（語群）に分かれているのですが、歴史的経緯からグループ内での相違点、また逆にグループを越えた共通点もあるのです。一例を挙げると、ウクライナ語・ベラルーシ語・ロシア語はともに東スラヴ語群に属しますが、ウクライナは一部ポーランドの領域に入っていたこともあり、ウクライナ語は特に語彙面でポーランド語（西スラヴ語群）とよく似ています。結果的に、系統的に近いとされるウクライナ語とロシア語は、かなり違ったものになっているのです。ただし、両言語の中にも方言的バリエーションがあり、二項対立というよりはグラデーションのような連続体を成しているというのが正確でしょう。

さて、現在もウクライナとロシアの戦争は終わりが見えず、当然ですがウクライナにおける反ロシア感情は高まるいっぽうです。元々東部・南部を中心にロシア語を母語とする国民も多く、ウクライナ語とロシア語の両方が話せる人々が多数派を占めています。ただロシアの全面侵攻以降に行われた世論調査では、使用言語をロシア語からウクライナ語に切り替える動きも確認され、「ロシア語離れ」と言える状況です。両言語の差異を強調する論説も目立ちます。

どうしても政治や軍事に関する報道が先行してしまいますが、状況を正しく理解するためには、背景にある言語や文化を考えることが不可欠ではないでしょうか。ただ日本では日本語を母語とする国民がほとんどですから、国と言語を１対１の関係で捉えてしまいがちですね。日本の状況に置き換えて少し考えてみると、「言語」としては１つの日本語でも様々な方言があり、いわゆる関西弁と共通語でも、特に発音面はかなりの違いがあります。ウクライナの多くの人々がロシア語も使えることを考えると、ウクライナ語とロシア語の違いは（現地の体感としては）日本の方言間ぐらいのものなのかもしれません。日本は幸いにも１つの国として平和に存在していますが、もし西日本と東日本が違う国になっていたら……などと想像してみると、イメージが湧いてくるでしょうか。言語がアイデンティティの形成に重要な役割を果たしていることは確かですが、言語と国籍（あるいは民族）をそのまま結び付けてしまうのも問題です。

本書はごくごく一部を概観したものですが、戦争という惨禍をきっかけに、ことばの持つ役割について今一度考えてもらえればと思います。